

〈研究ノート〉

近代日本と韓国(北朝鮮)における東学思想及び
甲午農民戦争に関する先行研究の到達点と問題点

——甲午農民戦争百周年以前までの研究を中心に

朴 孟 洙

はじめに

一 時期別の研究動向

二 争点別の研究動向

1 東学思想の本質とその性格

2 東学思想と甲午農民戦争とのかわり

3 甲午農民戦争の歴史的性格

4 甲午農民戦争の主導・主体勢力

5 甲午農民戦争の社会経済的・政治的志向

6 甲午農民戦争以降の東学農民軍の動向

結び…先行研究の問題点と今後の課題

はじめに

一八九四年二月に、朝鮮南部の全羅道チョルラドの古阜コブから始まった甲午農民戦争(東学農民戦争)は、朝鮮近代史における最大規模

の民衆運動であったことと、また日清戦争の原因となり、日清戦争以降の朝鮮半島をめぐっての国際情勢が大きく変わっていく直接的、かつ決定的な契機をなす点で、韓国をはじめとする朝鮮民主主義人民共和国、日本、そして中国などで数多くの研究がなされてきた。まず、韓国における先行研究を見てみると、東学思想と甲午農民戦争に関する研究は、すでに一九一〇～二〇年代に芽生えていた。戦後に入ってから、歴史学・文学・哲学・宗教学などの諸分野にかけて、多くの研究者によって数々の論文と数十冊に及ぶ単行本、そして二十本にものぼる博士學位論文にまとめられた¹⁾。

このような膨大な先行研究は、時期別あるいは争点別の検討によらなくては、その総体的研究傾向や研究レベルを理解することはできない。

膨大な先行研究を概観するために何人かの研究者は、先行研究についての検討を試みた。しかし、こうした検討にもかかわ

らず、東学思想の性格及び東学思想と甲午農民戦争とのかかわりをはじめとするこの分野における核心部分は、今なお十分に解明されているとは言えない^③。

一方、史料の新しい発見、あるいは史料の再解釈によって、この分野についての研究では、様々な論点が新たに生まれつつあるように思える。とくに、一九八〇年以降の韓国では、新たな考え方をもった若手研究者たちの活動が顕著である。彼らによる東学思想と甲午農民戦争についての研究の動向も、一九八〇年代以前の研究とかなり異なっているという点で注目するに値する。

本稿では、甲午農民戦争から百周年に当る一九九四年を迎え、様々な記念事業が本格化しはじめる一九九四年以前までの時期を対象にし、東学思想と甲午農民戦争に関する先行研究の成果やその問題点を検討する^④。

手順としては、まず時期別の研究成果を概観し、つぎに六つの争点を選定し、先行研究の到達点と問題点を浮き彫りにする。その上で、今後の課題について見通しを述べたい。

一 時期別の研究動向

東学思想と甲午農民戦争に関する研究は、すでに一九〇〇～一九二〇年代からはじまっていた。例えば、朝鮮の京城で一九〇六年六月に創刊される『万歳報』という近代新聞、一九〇五年に成立した天道教^⑤の機関紙として一九一〇年八月に創刊さ

れる『天道教会月報』、そして天道教のもう一つの機関紙として一九二六年に創刊される『新人間』などには、甲午農民戦争に参加した東学教徒らの手記が多く載せられており^⑥、また、日本に留学するなどいわゆる近代学問から影響を受けていた天道教の知識人たちは、一九一〇年代から甲午農民戦争についての初歩的な研究に乗り出し、その成果をこれらの機関紙に掲載した^⑦。さらに、一九二〇年以降には天道教の知識人たちを中心に創刊された『開闢』^⑧にも、東学思想と甲午農民戦争に関する論説が頻繁にあげられるようになった^⑨。

このことにより、一八九四年の時から実に三十余年を経て、李敦化^{イドンファ}などの天道教系知識人によってようやく学問的なアプローチがはじめて行われるようになった。そればかりではなく、この問題は近代文学の世界でも注目されるようになった。すでに、一九一〇年代から登場しはじめた東学思想と甲午農民戦争をテーマとした新小説が社会的に大きな影響力を与えたことがそれである^⑩。

しかしながら、天道教系知識人を中心とした研究にも問題がなかったわけではない。

第一に、一九二〇年代の天道教の知識人は、東学をあくまでも「宗教」ととらえ、甲午農民戦争における東学の役割をあまりにも強調しようとしたことがあげられる。この点について、裴元燮^{ペヘンソク}は「東学教理の理論化に重点が置かれていたので、『農民戦争』についての見解も宗教的性格を浮き彫りにするために

示された、という限界を見せている」と指摘している^⑩。この指摘は正当であろう。

第二に、一九二〇年代以降、天道教系知識人によって競争的に編纂された東学史書が抱えている問題点があげられる。甲午農民戦争以降の東学教団は、より厳しい状況に直面した。政府側の弾圧の厳しさ、しかも甲午農民戦争の失敗による教団の分裂現象^⑪が表われるようになったのである。それによって、生き残った東学教団の指導者らは、それぞれ異なる立場で危機状況に対応していく一方、甲午農民戦争について異なる評価を下す記録を残すことになる。つまり、一九二〇年代以降編纂された東学史書は、東学及び甲午農民戦争の全体像を強調するよりも、ある一面だけを浮き彫りにしようとした問題点が見られる。

第三に、東学及び甲午農民戦争についての研究状況をめぐる問題があげられる。東学は、一八六〇年の成立から一九〇五年の天道教への改編まで、ほぼ五十年間にわたって厳しい弾圧にさらされていた。さらに、一九一〇年の「日韓併合」以後の朝鮮は植民地となり、東学思想及び甲午農民戦争についての客観的研究ができない状況が長く続いた。そのため、東学及び甲午農民戦争の歴史は、「事実の潤色」または「神秘化」によって歪曲される現象も少なくなかった^⑫。

ただし、この時期における研究の中で注目すべき成果も一部あった。それは、甲午農民戦争に参加した東学教徒らの手記や

回顧談などが数多く集められるようになったことである。もう一つは、甲午農民戦争の性格を「革命」と規定したり、朝鮮末期における民衆の「階級意識」の覚醒と見なしたりすることによって、甲午農民戦争を「民衆運動」として認識しはじめた点であろう。

要するに、一九二〇年代における研究は、天道教、侍天教などの東学の各分派が中心となっており、東学の宗教的性格を強調し、東学教理の体系化に偏った研究だったという限界を示している。しかし、東学教徒らの手記や回顧談が、初期の東学教団の状況や甲午農民戦争のことの復元に有用な史料であることは間違いないだろう。また、東学思想が帯びている「革命」的性格をはじめ、甲午農民戦争における「民衆運動」の性格にはじめて目が向けられたことも、注目すべきことではないかと思われる。

一九三〇年代から四〇年代における東学思想と甲午農民戦争に関する研究は、天道教系知識人による研究、すなわち天道教という「宗教的」立場を基にした研究から、一般の研究者、すなわち客観的立場を重視する研究にかかわることとなった。この時期における研究は、日本人研究者及び数少ない朝鮮人研究者によってなされた。

日本人研究者は、甲午農民戦争の時に活躍した日本人外交官たちが書き残した回顧録をはじめ^⑬、当時の日朝両国の外交文書などを素材にし、かなり実証的な研究を行った。この日本人による研究は、実は「併合」(一九一〇年八月)を境にし、朝鮮へ

渡った何人かの日本人が書いた東学思想及び甲午農民戦争に関する著作からはじまったといえる。⁽¹⁴⁾しかし、彼らの著作は東学經典の日本語翻訳や天道教の成立過程の考察など、いわゆる宗教問題ばかりに注目していたという点で極めて初歩的水準にとどまっていた。こうした一九一〇年代の研究を踏まえながら、より系統的にまた実証的にまとめた研究が、一九三〇年代から四〇年代にかけての田保橋潔⁽¹⁵⁾、村山智順⁽¹⁶⁾、菊池謙讓⁽¹⁷⁾、石井寿夫⁽¹⁸⁾などの研究である。ただし、この時期の研究は、日本の朝鮮植民地支配を正当化しようとする目的による研究がほとんどだったことを指摘しておきたい。したがって、これらの研究は、甲午農民戦争を朝鮮史における内在的發展という視点で見たり、朝鮮王朝の矛盾と関連して理解する視点が希薄であった。単に、東学を中心とした一つの類似宗教団体が起こした「変乱」として理解していた。さらに、東学という新宗教は、「惑世誣民」の類似宗教にすぎなかったと評価された。⁽¹⁹⁾

しかしながら、石井寿夫や野原四郎⁽²⁰⁾の見解は他の研究者と若干異なり、注目すべき点もあった。とりわけ石井は、

済愚自身はあくまで東学を一つの宗教としていたのであって、決して政治的革命原理として鼓吹したのではない。⁽²¹⁾

しかし、その性格は現実否定的であり、たやすく革命原理ともなりうるものであった。⁽²²⁾

と述べ、東学思想と甲午農民戦争の関連性を指摘した。ところが、『龍潭遺詞』⁽²³⁾にある歌詞の制作年代をもとにし、東学の教祖崔済愚⁽²⁴⁾の東学思想が年次的に形成されたとした点や、東学の「東」の意味を「東洋」と解釈し、東学を東洋民族主義だと主張することで、結局、日本のアジア侵略を合理化しようとした点などは、問題点として指摘されている。⁽²⁵⁾

これに対して、朝鮮人研究者による代表的研究としては金庠基⁽²⁶⁾の「東学と東学乱」(一九三二)⁽²⁷⁾や桂奉瑠⁽²⁸⁾の「東学党暴動」(一九三二)⁽²⁹⁾があげられる。このうち、「東学と東学乱」は、朝鮮人研究者による最初の学問的著作である点で、また現地調査(彼の故郷は、甲午農民戦争の震源地である古阜と近い金堤である)を通して実証的研究が行われた点でもっとも注目すべき成果であった。彼の論文はとくに、東学出現の社会的・宗教的背景、東学の教義、教祖伸冤運動、そして東学乱Ⅱ甲午農民戦争などを相互関連づけて体系化した点で、東学思想と甲午農民戦争の研究における画期的な成果であった。

一方、この時期におけるもう一つの流れは、社会主義思想を受け入れた朝鮮人研究者の論著も少しずつ表われはじめたことである。上述のように、桂奉瑠の「東学党暴動」は、社会主義思想に基づいた最初の研究である。また、林和⁽³⁰⁾と李清源⁽³¹⁾なども、社会主義思想の立場からいくつかの著作を残している。例えば、林和は主として『新階段』を通じて、また李清源は『批判』を通して、一九三〇年代の天道教の文化主義を批判しつつ、

東学思想の意義を検証しようとした。天道教の機関紙『新聞』五十九号(一九三二年九月号)に、天道教の理論家である李敦化の社説「組織の哲理」や趙基萊(チヨギカ)の「朝鮮運動と領導問題」が載せられたことが口火となり、社会主義者たちは、社会主義系列の雑誌『新階段』、『批判』、『全線』などに天道教の運動の路線を激しく批判する論説を書いた。それに対して、『新聞』、『党声』、『農民(朝鮮農民の後身)』、『이러타』といった天道教系列の雑誌には、社会主義者らを批判する天道教の知識人たちの論説が数多く載せられた。このように、社会主義者たちは天道教の知識人たちとの激しい論戦を通じて、東学思想と甲午農民戦争についての研究を続けていった。⁽²⁷⁾これらの社会主義者たちによる研究は、朝鮮半島の分断以降の北朝鮮における甲午農民戦争の研究につながる点で注目値する。

戦後に入ってから、東学思想と甲午農民戦争に関する研究も大きく変りはじめる。まず一九四五年以降の韓国における研究を見ておこう。社会主義思想をもとにした研究がある程度許されていた朝鮮戦争の勃発の直前までは、社会主義系列の研究者们たちによる研究が目立つ。代表的な研究としては、全錫淡(チョンソクタン)の「李朝封建社会の総結としての東学農民乱」(一九四九)⁽²⁸⁾があげられる。戦後日本では、主として在日韓国・朝鮮人が中心となり、植民地期の研究とは根本的に違う見解を次々と発表した。朴慶植(パクギョクシク)と姜在彦(カン재彦)⁽²⁹⁾の研究がそれである。以後、一九七〇年代までの東学思想と甲午農民戦争に関する研究は、めざましい

発展を遂げた。一九四五年以降から一九七〇年代にかけて、韓国および日本を中心としてなされた研究の中で研究史的意義を有する論文については、本文の注30を参照されたい。⁽³⁰⁾

その頃の研究の焦点は、東学思想の本質と性格、東学思想・東学組織と甲午農民戦争との関連性、甲午農民戦争の展開過程、甲午農民戦争の性格問題などを解き明かすことに置かれていた。とりわけ、東学思想の性格究明、および東学思想と甲午農民戦争とののかかわりの度合いを明確にすることが中心であった。次のような指摘は、一九五〇年代から七〇年代にわたる主な研究傾向を雄弁に物語っている。

一九五〇年代までは植民主義史学のもとでなされた研究を再評価しようとする研究が行われた。すなわち、植民地下の植民主義史学の克服が一九五〇年代までの史学界に与えられた命題と呼んでよい。それは一方では停滞論と、もう一方では農民戦争論の立場を有する。つぎに、一九六〇年代から一九七〇年代までは軍事政権の成立後に提起された近代化や、軍事政権のイデオロギーとしての意義を持つ民族主体性との一定の連携性を帯びた研究がなされた。⁽³¹⁾

このように、これらの研究では東学思想における進歩的・近代的・革命的性格があまりにも過大評価されたり、東学と甲午農民戦争との関係の上で、東学思想と東学組織の役割が拡大解

積される傾向が強かった。もちろん、北朝鮮および韓国での数少ない研究者たちによって、東学思想そのものと甲午農民戦争における東学の役割を厳密に評価しようとする研究者たちもいなかったわけではないが、それは一つの支流であったにすぎない。

要するに、一九七〇年代までの研究は、甲午農民戦争における東学の役割を強調するにしろしないにしろ、東学と甲午農民戦争との関わりを意識した研究だったと言える。そのようになった理由は、「植民主義史学の克服という命題のもとで、固有の主体性を強調し、過去の否定的評価は肯定的に、消極的評価は積極的に裏返して拡大解釈する傾向が強かったため」⁽³³⁾であるが、むしろ根本的な原因を、

東乱（＝甲午農民戦争、注は筆者）の指導原理を東乱の主体たる農民層の社会経済的生活条件の内在的变化と結びつけたり、あるいはその内在的变化に規定され制約される農民層の社会意識の変化と関連付けて理解しようとする視点が欠けているからである。⁽³⁴⁾

という鄭昌烈^{チョンチャンニョル}の指摘は適切であろう。

一九八〇年代に入ってから、戦前と五〇年代から七〇年代にかけてなされた成果を受け継ぎつつも、新しい視点や新しい史料発見による研究が盛んになった。この時期の主な研究成果

と評価される論文については、注34を参照されたい。⁽³⁵⁾

一九八〇年代以降の研究では、大きく分けて甲午農民戦争の性格問題、甲午農民戦争の主導および主体勢力の問題、甲午農民戦争の社会経済的志向の問題、甲午農民戦争以後の農民軍たちの動向の問題などが中心となった。こうした研究の基本的な方法論は、甲午農民戦争を当時の朝鮮社会における社会経済的生活条件の内在的变化と関連づけて論じることであった。この点については、

開港以後、朝鮮王朝社会が日本や欧米への開港を通して世界資本主義に編入されたという条件、それによる商品貨幣経済との関係の拡大によって、農民層が富農・中農・小農・貧農・半無産者層に分化されたという条件、このような状況が地主層には社会経済的に有利な条件を与えたことに注目しつつ、こうした条件での階級的理解の内容を重視する見方を提示した。⁽³⁶⁾

と、鄭昌烈は述べている。

二 争点別の研究動向

一九一〇年代以降、研究しはじめた東学思想と甲午農民戦争についての研究上の争点を主題別にまとめると、第一に東学思想の本質とその性格、第二に東学思想と甲午農民戦争とのかか

わり、第三に甲午農民戦争の展開過程とその性格、第四に甲午農民戦争の主導および主体勢力、第五に甲午農民戦争の志向性の問題、第六に甲午農民戦争以降の東学農民軍の動向などがあげられる。ここでは、以上の六つの争点を中心に、甲午農民戦争百周年以前までの先行研究を検討することにした。

1 東学思想の本質とその性格

一八六〇年四月五日に崔済愚は、慶尚道慶州の龍潭で最も特別な体験をした。この特別な体験は、東学經典である『東經大全』の「布徳文」及び「論学文」では、以下のように述べられている。

意はさりき、四月心寒く身戦き疾ひ執症を得ず、言難状を得ざるの際、仙語かありて忽ち耳中に入る。驚き起て探問すれば、即ち曰く懼るる勿れ。恐るる勿れ。世人我を上帝と謂ふ。汝上帝を知らず耶。其の然る所を問へば、曰く余亦功なし、故に汝を世間に生みて人に此の法を教へしむ。疑ふ勿れ。疑ふ勿れ(「布徳文」)。

身戦寒多く、外に接霊の気あり。内に降話の教あり。之を視れとも見えす、之を聴けとも聞えす。心に尚ほ怪しみ訝かり、心を修め気を正ふして問て曰く、何為そ然る若きや。曰く吾心は即ち汝の心なり。人何そ之を知らむ。天地を知

りて而して鬼神を知るなし、鬼神は吾なり。汝に無窮無窮の道を及ぼす。修めて之を煉り、其の文を制して人を教へ、其の法を正めて徳を布くときは、汝をして長生せしむること天下に昭然たらむ。吾亦幾と一歳に至り修めて之を度れば、即ち亦自然の理なきにあらず(「論学文」)。

ここで、崔済愚は「身が物凄く戦き、心に寒気がし、なにものが存在しているにもかかわらず、それを見ようとしても見られないし、聴こうとしても聞けないうちに、『降話の教』(「仙語」があった)としている。このような体験を崔済愚は、その後、「万古になき無極大道を受けた」と述べている。彼は、こうした特別な体験をした後もほぼ一年にわたって修練を積み重ねた。その後、一八六一年六月頃から本格的な「布徳」(東学のことを人々に教えること)活動に乗り出し、「万古になき無極大道」を「東学」と名づけた。

それでは、崔済愚が創始した東学という思想は、果たしていかなる思想だったのだろうか。一言で言えば、東学思想は、朝鮮後期における民衆の願望を反映した民衆思想であると言えるだろう。東学經典に示されている様々な思想的要素について検討してみよう。

まず、取り上げられるのは、朱子学的理念に基づいていた朝鮮後期社会に対する批判である。例えば、崔済愚は『龍潭遺詞』の「勸学歌」で、以下のように現実の社会を批判している。

江山の見物はすておきて 人心風俗を探り見るに

父子親あり君臣義あり 夫婦別あり長幼序あり
朋友信ありと云へとも 人心風俗は怪しけなり

ここで、崔濟愚は朱子学における実践倫理である「五輪」が存在しているにもかかわらず、現実社会の「人心風俗は怪しくなっている」と批判している。このような批判は、『東經大全』の「布徳文」では、一層厳しくなっている。

挽近以来、一世の人各自心を為り天理に順はず、天命を顧みず、心常に悚然として向かふ所を知ること莫し。

ここでは、「二世の人各自心を為り天理に順はず、天命を顧みず」と指摘し、世の中の人々が天理に従わず、天命を顧みていないと批判した。このように、東学思想の中では朱子学的支配秩序の虚構化現象に対する批判が打ち出されている。

次に、東学思想では、当時の民衆が最も怖がっていた「怪疾」(コレラ)も治すことができ、「長生き」もできるという思想が強調されていた。いわゆる「治病」思想が強調されているのである。以下に、『東經大全』に述べられている「治病」に関する記述を取り上げる。

汝に無窮無窮の道を及ぼす。修めて之を煉り、其の文を制して人を教へ、其の法を正めて徳を布くときは、汝をして長生せしむること天下に昭然たらむ。吾亦機と一歳に至り修めて之を度れば、即ち亦自然の理なきにあらず(「論文」)。

これは、朝鮮後期に周期的に流行していた「怪疾」(コレラ)を予防すべき適当な手段を手に入れることができなかった民衆にとつては、救援の「福音」となったに違いない。

その次に、東学思想では、「西勢東漸」の状況と「西学」(カトリック)の急速な広がりによつてもたらされた対外的危機や民衆の心理的不安を代弁する「反侵略」思想も表われている。例えば、『東經大全』では、以下のような記述が見られる。

庚申(一八六〇年、注)に至り、伝え聞く西洋の人、以て天主の意と為し、富貴を取らず攻て天下を取るに其の堂を立て其の道を行ふ。故に吾亦其れ然り、豈に其れ然らむと、之れ疑ふことあり(「布徳文」)。

ここでは、崔濟愚が一八六〇年に「西洋の人、以て天主の意と為し、富貴を取らず攻て天下を取るに其の堂を立て其の道を行ふ」という話を聞き、それが果たして本当かどうかを疑ったということが記されている。さらに、『龍潭遺詞』では、「所

謂西学に入りし人、如何に察するも名人なし」⁽⁵⁾、「故なく神に向かひ、一夜祈る言葉に、三十三天の玉京台に、我死なば行かしめよ」と指摘し、朝鮮後期におけるカトリック信者たちの信仰ぶりに対して批判している。

その他、東学經典では、「甲子年（一八六四年）に新しい時代が到来する」という終末論的思想⁽⁶⁾、金持ちの道人と貧乏な道人相互の助け合うことを強調していた「有無相資」の思想⁽⁷⁾、すべての人が「侍天主」（ハヌルニムを侍すること）できるという平等思想⁽⁸⁾などが語られていた。

以上、東学思想の本質について簡単に論じたが、東学思想の本質とその性格をいかにとらえるかによって甲午農民戦争の性格、東学思想と甲午農民戦争とのかわり、甲午農民戦争の主導及び主体勢力についての理解が異なってくる。

先行研究は、まず東学思想を単なる宗教思想ととらえる見解⁽⁹⁾に東学思想にブルジョア革命の原理を見出して革命理念ととらえる見解、最後には東学思想は革命の原理とか理念ではないが、その帯びている現実否定的性格からあらわれる反封建・反侵略的志向が当時の社会経済的状况との結合によって革命の原理として転じた⁽¹⁰⁾ととらえる見解などに分けられる。

東学思想を単なる宗教思想ととらえている見解は、村山智順⁽¹¹⁾、田保橋潔⁽¹²⁾などの植民地時代の日本人研究者をはじめ、朝鮮の研究者である全錫淡⁽¹³⁾と呉吉宝⁽¹⁴⁾、韓国の金容燮⁽¹⁵⁾などによって示された。

東学思想を革命の原理とみなし、東学思想が直ちに甲午農民戦争の指導理念であったと受け止める見方は、東学の後身である天道教教団の知識人たちをはじめ、金庠基⁽¹⁶⁾、金龍徳⁽¹⁷⁾、金昌洙⁽¹⁸⁾などによってなされた。

東学思想そのものが直ちに革命の原理とか理念だったわけではなく、したがって東学思想はそのまま一八九四年の甲午農民戦争の直接的な指導原理にはなりえなかったが、東学思想の中に含まれた反封建・反侵略的志向が当時の社会経済的状况との結合によって革命の原理に転じた⁽¹⁹⁾ととらえる見解は、石井寿夫⁽²⁰⁾、朴慶植⁽²¹⁾、姜在彦⁽²²⁾、韓沽昉⁽²³⁾、金義煥⁽²⁴⁾、金榮作⁽²⁵⁾、横川正夫⁽²⁶⁾などによって示された。

このように、東学思想の本質に関する様々な理解は、直ちに東学と甲午農民戦争との関係および農民戦争の性格究明とつながる。さらに、東学と甲午農民戦争の関係についての先行研究のありようを、詳しく見て行くことにしたい。

2 東学思想と甲午農民戦争とのかわり

まず第一に、この問題に対する見方としては、東学思想が直ちに一八九四年の農民戦争の指導原理となったと認める立場があげられる。

こうした見解を示した研究としては、天道教側の人たちによる研究や、金庠基の「東学と東学乱」（一九三一）、金龍徳の「東学思想研究」（一九六四）などが代表的である。とりわけ、

金龍徳は、東学の「人乃天」思想を徹底的な平等主義と、「開闢」思想や「造化」思想を革命原理と、東学思想における民族主義的要素を民族主義と把握し、東学の平等主義・革命主義・民族主義が直ちに甲午農民戦争の指導理念だったとみなした上で、

要するに、東学思想による教団組織と新世界を夢見ることなしに、そして造化信仰なしにどうやって数百万にのぼる大衆を動かせるのであろうか。東学思想なしに東学革命がなかったことは間違いないと言える。^⑧

と主張している。

第二に、注目される研究は、東学と一八九四年の甲午農民戦争を同一視はしないとはいえ、これらに一定の関連性を認める見方である。すなわち、東学思想が農民戦争の指導原理とは言えないものの、当時の客観的条件の中で東学思想と東学教門が媒介となって農民戦争は展開されたとみなす立場である。

こうした研究としては、石井寿夫の「教祖崔濟愚における東学思想の歴史的展開」(一九四二)、朴慶植の「開国と甲午農民戦争」(一九五三)、姜在彦の「朝鮮における封建体制の解体と農民戦争」(一九五四)、韓沽昉の「東学思想の本質」(一九六九)、金義煥の「一八九二―三年の東学農民運動とその性格」(一九七〇)、金栄作の「東学思想と農民蜂起」(一九七五)、

慎鍾廈の「東学と甲午農民戦争の民族主義」(一九八七)などの研究が代表的である。このような研究の共通点は、甲午農民戦争での東学の一定の役割は認めるべきであるとしているが、その役割は、一種の媒介あるいは外皮としての役割に過ぎないと評価する点である。だが、東学の役割を媒介の役割と認めるにしろ、外皮の役割と認めるにしろ、その機能をどのように設定するかによって研究者たちの見解は様々である。

朴慶植の場合は、「開国と甲午農民戦争」で、社会が農奴関係の上で停滞されている時のすべての改革運動は、宗教的外皮を被るという「宗教的外皮説」に基づき、「反李朝的な没落兩班及び吏族と広汎な貧農大衆を同盟させ、集団化の役割を果たしたのが東学であった」と評価し、また、「農民の闘争と結び付いて大きな農民戦争の指導的役割を果たすようになった」と主張している。

姜在彦は「朝鮮における封建体制の解体と農民戦争」(一九五四)、「東学Ⅱ天道教の思想的性格」(一九六九)、「封建体制の解体期の甲午農民戦争」(一九七〇)などの一連の研究を通して、東学思想と甲午農民戦争の問題に取り組んだ。彼は、

東学思想は、それが反侵略・反封建の現実批判のイデオロギーであったにしても、末期的現実止揚の土壌のうえに創出されるべき新社会実現への方向と方法は、^⑨無為而化^⑩による後天開闢Ⅱ地上天国の実現ということであった。こ

れは現実批判の人民闘争に新しい展望をあたえる意味において鼓舞的であったが、しかし社会発展の合法性からみてきわめて観念的であり、幻想的であった。^{②③}

と評価し、東学思想は新しい社会を生み出す革命原理とはなっていないと述べている。そして彼は、一八九四年の農民戦争は東学における二つの側面、すなわち、宗教的標識と階層的欲求の中で教祖伸冤運動(一八九二年から一八九三年にかけて、東学教祖崔濟愚の冤罪をはらすことを要求し、東学教徒たちが行った示威運動)を通して階層的欲求が一層強まり、宗教的標識よりは階層的欲求の実現に先立った全羅道の接主らによって幅広い分野での民衆が集まった農民戦争に発展したのである、と述べている。^{②④}

韓国の研究者として東学思想と甲午農民戦争に関する研究に取り組んできた韓沽勛は、一連の研究を通して東学思想の性格、甲午農民戦争の主導勢力、甲午農民戦争の展開過程、東学と甲午農民戦争との関係を明らかにすることに力を入れてきた。彼は東学思想について、それ自体がいかなる政治思想あるいは社会思想ではありえないと述べて、「ところが、それがあくまでも現実否定的意識のもとに立っているところで、『革命的でありうる』性格を持っている」と指摘している。すなわち、東学思想が帯びている現実否定的性格は、東学の指導層が宗教的立場から離れて、彼らの立場に近い農民の立場に立った時には

革命的性格をあらわすこともありうる。そして、実際にそうした役割を東学の組織と一部の接主(東学の組織である「接」を率いている指導者)たちが担っていたと、韓沽勛は述べている。^{②⑤}

金義煥は「初期東学思想に関する研究」(一九六四)、「一八九二―一三年の東学農民運動とその性格」(一九七〇)、『近代朝鮮の東学農民運動史の研究』(一九八六)を通じて、甲午農民戦争の主体は一八九二―一九三年の一連の東学農民運動、すなわち東学教団側が教祖伸冤運動と呼んでいる参礼集会・報恩集会を通して作り出されたと指摘している。^{②⑥}

金榮作は「東学思想と農民蜂起」(一九七五)で、初期の東学思想は「体制構想の観念性」と「政治機能の空洞化」という二つの点で政治的限界があり、「全羅準の下層幹部による東学の実践的解釈によって、東学思想およびその組織を農民蜂起にかりたて、分散的・孤立的農民一揆を統一的農民蜂起にもりあげたのである」と指摘している。^{②⑦}

一方、慎鎭廈は「東学と甲午農民戦争の民族主義」(一九八七)で、東学思想が直ちに甲午農民戦争の指導理念だという通説と、東学が単なる甲午農民戦争の宗教的外皮に過ぎないという見方とを批判する。そして、『全羅準供招』と黄玿の『梧下記聞』の内容を根拠として、「思想宗教教団としての東学と一般農民の結合」を強調する結合説を提示した。^{②⑧}

第三には、東学と一八九四年の甲午農民戦争とを別のものとして認める見解である。

このような見方の共通点は、一八九四年の甲午農民戦争を東学とのかわりではなく、朝鮮王朝の封建社会の解体期に頻繁に起きた民乱の延長線上でとらえ、農民戦争の理念を、封建社会の解体期に向かって成長してきた民衆たちの意識の成長に求めた点にある。そして農民戦争の主体は東学とは関係の無い農民層だとし、全琫準チョンボンジュンも東学とは無関係の農民指導者であったとされる。こうした見方をする研究者としては、全錫淡、金容燮、呉吉宝、朴宗根パクチョンゴンなどがある。

まず全錫淡は、「李朝封建社会の総結としての東学農民乱」(一九四九)で、甲午農民戦争を前後として朝鮮をとりまく国際政勢と朝鮮王朝の封建社会で頻繁に起こった民乱について述べた。また一八七一年の寧海ヨンヘにおける崔時亨チュエシヒョウを中心とする東学の指導部が、李弼済イヒルジの蜂起提議を断った事実を取り上げ、東学の指導部は甲午年の民衆蜂起を指導する力も階級的意識もなかったと批判した⁽⁸⁾。そして、次のような引用文からもうかがわれるように、彼は農民戦争を当時盛んに起きていた民乱と結び付けて理解しようとした。

東学農民乱は、緊迫した国際政勢を背景にして内政の腐敗によって自然発生的に起きた民乱が東学の組織と合致して行われた農民戦争であった⁽⁹⁾。

次に、金容燮は「東学乱研究論」(一九五八)、「『全琫準供

招』の分析」(一九五八)などの研究を通して、一八九四年の甲午農民戦争が朝鮮後期以来の民乱の延長線上にあるとしている。また、東学思想と東学教門の集会や甲午農民戦争とはまったく無関係であり、東学は単なる「包」組織を提供し、農民層の動員をしやすくしたという表面的役割しか果たさなかったと述べている。そして、彼は甲午農民戦争の指導者である全琫準についても、呉知泳オジヨウの『東学史』を根拠として「もとより東学とは別個のいわば改革思想家であった」と述べている。しかし、最近、呉知泳の『東学史』(刊行本)についての新たな検討によって明らかにされたように、その史料価値は疑わしく、当然のことながら、上の見解は再考を要する⁽¹⁰⁾。

北朝鮮の呉吉宝は「甲午農民戦争と東学」(一九五九)、「甲午農民戦争と東学について」および「執綱所について」(一九五九)、「甲午農民軍の軍事芸術」(一九六〇)、「一八九四―五(甲午)の農民戦争の性格について」(一九六四)、「甲午農民戦争」(一九六八)など、東学や甲午農民戦争に関する数多くの論文を書いている。東学と甲午農民戦争との関係についての彼の基本的な見解は、「甲午農民戦争と東学」(一九五九)で示されている。彼は東学思想を過大評価し、東学思想があたかも甲午農民戦争の思想的旗幟となったようにとらえる見解や、東学の組織が甲午農民戦争の広がりにおける中心的組織であったとする見解を批判し⁽¹¹⁾、宗教的外皮説の創造的適用を主張した。し

たがって、甲午農民戦争は、全羅道古阜における農民の自然発生的暴動から始まり、全瑋準をはじめ、良心的かつ先進的な思想の持ち主だった儒生両班・知識人たちによって全国的に拡大されたものであり、こうした広がりには、むしろ農民軍の活動や農民軍の発表した檄文が大きな役割を果たしたと指摘している⁽⁸⁶⁾。彼は全瑋準についても東学の接主ではないと見なしている。

朴宗根は「東学と一八九四年の農民戦争について」(一九六二)で、東学の組織が農民軍を集結させたことや、全瑋準が東学徒であったことは認めている。しかし、全瑋準は東学の宗教的利益を代弁したのではなく、「農民軍の指導者」として蜂起したと評価しているのである⁽⁸⁷⁾。

そして、彼は古阜の蜂起が東学による計画的反乱ではなく、農民蜂起にほかならないとしている。とはいっても、彼は東学信徒が参加したことや東学の役割まで否定しているわけではない。いいかえれば、蜂起に参加した東学信徒たちは宗教的立場から東学の布教公認のために参加したのではなく、農民と共通の立場で農民のために立ち向かったと述べている⁽⁸⁸⁾。

3 甲午農民戦争の歴史的性質

一八九四年の甲午農民戦争が反封建・反侵略闘争であった点では、研究者たちはおおむね一致している。ところが、一九七〇年代までは、甲午農民戦争の反封建・反侵略的性質が農民戦争の展開において段階的に表われたと見なされてきた。すなわ

ち、ほとんどの研究者たちは甲午農民戦争をまず、第一段階の古阜民乱、第二段階の第一次甲午農民戦争(三月蜂起)、第三段階の全州和約と執綱所時期、第四段階の第二次甲午農民戦争(九月蜂起)などに分けている。そして、古阜民乱から第一次農民戦争までは、主として反封建闘争の性格を帯びていたとみなしたのに対して、第二次農民戦争から反侵略的性質が明確化されたと理解してきた⁽⁸⁹⁾。しかしながら、八〇年代に入ってから反封建的かつ反侵略的な性格が農民戦争の展開過程において段階的に表われたとする見方は、その後批判されることになる。

甲午農民戦争の反封建、反侵略という性格が、段階的に表われたとする見方に対しての新たな検討は、一九八〇年代に入つて、在日の趙景達と韓国の鄭昌烈によってまとめられた。一九八二年にはほぼ同時になされた研究を通じて両者は、一九八三年の報恩集会、すなわち第一次甲午農民戦争以前の段階からすでに反封建・反侵略的性質がともに表われたと明らかにした。具体的に見てみると、趙景達は「東学農民運動と甲午農民戦争の歴史的性質」(一九八二)、鄭昌烈は「東学教門と全瑋準との関係」(一九八二)および「古阜民乱の研究」上、下(一九八五)などの論文を発表した。以上の研究で両者は、東学教徒が中心勢力であった一八九三年の忠清道の報恩集会について実証的な検討を行った上で、報恩集会段階における一部の東学教徒たちが報恩に集まらず、全羅道の金溝泉院坪に集まって「斥倭洋」というスローガンを掲げて集会を開いたのみならず(金

溝集会、ソウルに味方を派遣し外国の公使館などに「倭洋を声罪致討（朝鮮駐在のすべての日本人や西洋人を攻撃し殺す）」という排外主義思想に満ちた檄文を掲示したことを根拠として、これまでの通説を批判した。いうまでもなく、金溝県院坪の集会を導いた中心人物としても全臻準を取り上げた。そのうち鄭昌烈は、特に「斥倭洋倡義」というスローガンを掲げた報恩集会も全臻準を中心とした金溝集会の勢力による組織的活動の結果だと見なしている。また、彼はこのような斥倭洋の反侵略的志向が、一八九三年十一月の「沙鉢通文」挙事という計画にもつながり、翌年の一月の古阜民乱もやはり金溝集会の勢力の組織的、かつ計画的行動であったと述べている。^⑩こうした両者の研究は、実証面ではまだ足りない部分があるものの、第一次甲午農民戦争以前にすでに反侵略という性格が明確に打ち出されたことを明らかにした点で高く評価されるべきであろう。

しかし、甲午農民戦争における反侵略的性格が、第二次甲午農民戦争の段階で初めて表われたのではなく、その以前、すなわち一八九三年三月の報恩集会や金溝集会の段階から表われたということが、両者の研究によって明らかになったとしても、報恩集会や金溝集会の段階における反侵略的性格が第二次甲午農民戦争の段階に至るまでどのような一貫していくのかという点は、解明されなかった。この点は、今後の課題であらう。

4 甲午農民戦争の主導・主体勢力

甲午農民戦争の主導・主体勢力についての問題は、研究が進むことによって、また見方によって変わってきた。現在では、「残班」（没落した両班）主導説、富農主導説、貧農主導説などに分けられる。また、甲午農民戦争を主導した全臻準などの指導者については、東学との関係を認めない見解と、東学の下層の指導者として東学思想を実践的に発展させた人物として見なす二つの立場がある。

まず最初に、甲午農民戦争を残班が主導したと見る見解は、四〇年代に北朝鮮の李清源によって論じられ、金庠基をはじめとする初期の研究者を経て、韓祐勛に至ってまとめられた。韓祐勛は「東学のリーダーシップ」（一九七〇）などの研究で次のように述べている。

東学の教主を含む東学教の接主たちは、没落した両班の末裔たる残班に属する者で既に名誉や地位を無くして久しかった。しかも彼らの境遇は平民（農民）のそれとほぼ同じであった。^⑪

そして、両班という支配身分層から脱落した残班たちは、彼らと立場が似ている平民Ⅱ一般農民たちと一緒にあって甲午農民戦争を主導的に導いたととらえている。

七〇年代まで通説として力を発揮してきた「残班」主導説に代わって、甲午農民戦争前後の社会経済的背景に関する研究が

次第に進み、甲午農民戦争の原動力を朝鮮後期社会で自生的に成長していたブルジョア的性格を有する富農層から求めるようになった(富農主導説⁹²)。一方、朝鮮後期社会でブルジョア階層は階級を形成するほど成長できなかったため、富農層たちは近代社会への変革の主体として登場することができなかった。そればかりではなく、帝国主義の侵略によってブルジョア性格を帯びる階層は革命性を無くし帝国主義の勢力と結ばれ、そうした彼らによって収奪・抑圧された貧農層を中心とする勢力が、農民戦争を主導するようになったという見方も表われた(貧農主導説⁹³)。

八〇年代には、慶尚道の北西部地方における甲午農民戦争の展開過程に注目してきた申栄祐^{シジョンフ}が、残班主導説、富農主導説、貧農主導説とは異なる見解を提示した⁹⁴。申栄祐は、慶尚道北西部で農民戦争を導き出した階層は東学教団によって接主・接司と任命された東学教団の幹部だとし、身分上彼らの多くは両班あるいは郷里層であり、経済的には中小地主あるいは富農層だったことを明らかにした。

5 甲午農民戦争の社会経済的・政治的志向

甲午農民戦争を通して当時の農民軍がいかなる内容の社会経済的变化を志向し、最終的にはどのような政治体制を夢見たかという問題は、甲午農民戦争の歴史的意義やその性格の究明において核心的問題だと言える。

一八九四年の甲午農民戦争の過程での「檄文」あるいは「布告文」などに示された農民軍の最終的志向については、すでに梶村秀樹によって検討されている⁹⁵。梶村は、農民戦争の志向について、一言で小商品生産者の利潤追求にあったとする。また、反乱の基本的原動力が広い範囲にわたる貧農にあったことは事実であるが、それは結局小商品生産への道を開くことに向けられたと指摘する。それに対して、韓国の韓祐^{ハンユ}は「開港期の商業構造の変化」(一九七〇)、『東学乱の起因に関する研究』(一九七二)などを通して、農民戦争の発生を李氏朝鮮後期の「三政」(田政、軍政、還穀)の素乱や地方官の不正に求め、農民戦争はこうした封建的支配体制や収取体制の矛盾の撤廃を要求する革命性を帯びた運動だと規定している⁹⁶。

以上のような見方に対して、趙景達^{チョウキョウダ}は「甲午農民戦争の指導者全瑋準の研究」(一九八三)で甲午農民戦争が志向した近代像を全瑋準を中心として説明しつつ、

全瑋準は、一面近代を模索しながらも、その近代の内容は朝鮮の資本主義化を意味するものではけっしてなかったといえる。反封建主義と反資本主義・反植民地主義を同時に主張する彼の模索する近代とは、この意味で反近代を内に含む近代―それは近代の超克ともいえる―であり、そこに現われる変革のあり方は自ずと反近代的変革であった⁹⁷。

というふうにまとめている。趙景達の見解に加え、鄭昌烈は「韓末変革運動の政治経済的性格」(一九八二)で甲午農民戦争の社会経済的志向について、

貧官官吏、新・旧型地主の抑圧を解体させ、封建的身分制度を廃止し封建的地主田戸制を改革しようとした。すなわち、地主的土地制度を解体させ、農民的土地所有を發展させようとした。そうした志向は前段階での農民の小商品生産者としての自立・發展の志向とは表裏の關係にあった。⁽⁹⁸⁾

と評したが、その後「甲午農民戦争と甲午改革」(一九八七)では見方を変えて、次のように述べている。

封建社会の次には近代資本主義社会が必ず来るという一種の進化論の見方にこだわる限り、韓国の近代社会の民族的性格はまともに研究できないことに注意を払う必要があると思われる。⁽⁹⁹⁾

このことは、趙景達の見解に従いつつ、甲午農民戦争の志向を新たに解釈しなおそうとする試みであった。つまり彼の見解は、甲午農民戦争の志向は民衆のコースによる非西欧的近代化の過程ともとらえられる、とまとめることができるだろう。

これに対して、慎鏞厦は「甲午農民戦争の時期における農民執綱所の設置」(一九八五)、「甲午農民戦争の時期における農民執綱所の活動」(一九八五)、および「甲午農民戦争の第一次農民戦争」(一九八五)などの研究で、「一八九四年の甲午『東学乱』は形態や方法からすれば、農民戦争の特徴を有し、その歴史的性格からすれば、農民革命運動の特徴を持っている」としている。また彼は、東学農民軍の執綱所の設置およびその活動を詳しく分析した後、一八九四年の東学農民軍の活動とその性格について次のように述べている。

貧官汚吏の処罰および苛斂誅求の廃止のみならず、身分制度廃止や地主制度の改革など、封建的旧制度を根本的に取り崩し、農民たちが望む農民的民族主義や農民的民主主義の新体制を立てようとする農民統治を果敢に行った。⁽¹⁰⁰⁾

最後に、注目すべき研究には、朴賛勝^{パクチャンソク}の研究がある。朴賛勝は、「東学農民戦争の社会経済的志向」(一九八五)という論文で、甲午農民戦争の展開過程の中で農民軍たちが一貫して目指したのは「支配と隷属関係に基づいた封建的社会経済体制を倒し、平等・自由・自立・自治などの原則に基づいた新しい社会経済体制を樹立することであった」⁽¹⁰¹⁾と主張している。

6 甲午農民戦争以降の東学農民軍の動向

一八九四年一月十日、全羅道の古阜民乱から始まった東学農民軍の全面的蜂起は、同年十月、「南北接」の連合農民軍が忠清道の公州牛金峙^{コンチユウグムチ}で、優勢な火力を備えた朝鮮政府軍と日本軍に敗北し、十一月から十二月にかけて江原道・黄海道・全羅道の西南部地方の農民軍が次々と敗退したことがきっかけとなつて、十二月末頃には朝鮮政府軍・日本軍・民軍などで編成された連合討伐軍を中心として、東学農民軍に対する大々的な弾圧作戦が行われた。これによって各地では、数多くの東学農民軍指導者をはじめ、一般の農民軍、そして蜂起に参加しなかった東学教徒までもが逮捕されるに至つた。そして、討伐軍の追撃と逮捕から逃れた一部の農民軍指導者たちと東学教団の幹部らは、生き残るために「変幻姓名(姓名を変えること)」したり、山の中に潜行して各地域の東学組織の再建活動や、農民戦争以降の反侵略闘争などを散発的にはかつた。翌年の一八九五年の「乙未事変(日本の浪人らが李氏朝鮮王朝の皇后を殺害した事件)」の際には、農民戦争に参加した農民軍の一部は儒生出身の指導者が率いる義兵陣営に入る場合もあった。農民戦争の震源地である全羅道では、甲午農民戦争以降同じく反侵略闘争を続けていた「活貧党」、「英学党」に加担する者もいた。東学農民軍の活躍が目立った時期に入道し、東学接主からの牒紙を受け、農民軍の活動に一定の協力をしていた儒生たちの中では、農民軍が全面敗退すると直ちに彼らを裏切り、農民軍指導者の逮捕の

先鋒に立つ事例も少なくなかつた。彼らは、日和見主義者の典型とも言えるだろうが、もう一方では全蹕準をはじめとする農民軍指導部の保守知識人層への包摂戦略の破綻とも言えるのではないだろうか。また、農民戦争の失敗の後、厳しい弾圧に直面した一部の農民軍は、当時布教されていたカトリック(天主教)またはキリスト教(改新教)に投身し、命拾いをする場合もあった。^(註) 東学教団の指導層の間では、全蹕準の蜂起に同調した教主崔時亨の路線がもたらした数多くの教徒の犠牲や各地域における東学組織の崩壊の危機にさらされ、「乱世隠遁」を標榜したり、宗教的な修練だけに専念する分派も現われ、または新しい宗教の設立運動に加わることもあった。^(註)

このように、甲午農民戦争の失敗以後、生き残つた東学農民軍の動きは様々な形で現われるようになる。しかし、今までこの分野は体系的な研究が行われず、一八九五年における義兵についての研究で断片的に言及されるにすぎなかつた。^(註) ただし、李榮晃^{イヨンハク}によつて「甲午農民戦争以降の東学農民の動向と民族運動」(二九九〇^(註))が発表されており、これからは一八九四年以後の農民軍の動向に関する研究も本格化すると思われる。

今後、この分野における課題は、一八九四年以降の様々な形で現われる残余農民軍の動向を単線的に把握しようとした態度から脱皮し、前述した多様な路線を実証的に究明することであろう。要するに、一八九四年以後も持続的・積極的に反封建・反侵略といった課題の実現のために活動する勢力(義兵、

活貧党、英学党、火賊)、反封建・反侵略の路線をあきらめて反動化・親日化する勢力(親日開化官僚への進出、一進会、待天教、農民的な民族主義から「文化主義」に転換する勢力(天道教)、「乱世隠遁」と現実不参与など宗教的な修道だけを強調する勢力(敬天教、青林教、東学教など)、他宗教への改宗や新しい宗教設立運動を標榜する勢力(キリスト教への改宗、甌山教及び円仏教の創始)などの傾向を当時の時代的な条件や社会経済的な条件と関連づけて明らかにしていかなければならぬだろう。

結び…先行研究の問題点と今後の課題

以上で考察したように、東学思想及び甲午農民戦争に関する韓国、日本、北朝鮮における研究は三国間に格差はあるものの、全体としては質量ともかなりの水準に達していることが分かった。しかし、このような多くの研究成果にもかかわらず、この分野に関する論点や基本的な視点は、いまだに合致点を導き出しておらず、東学思想と甲午農民戦争の全体像は明らかにされている、とは言えない。

管見では、東学思想と甲午農民戦争の全体像が描けなかった要因は、第一に、何よりも史料の問題にあると思われる。つまり、東学教団側や東学教徒だけでなく、甲午農民戦争当時の官側・儒生側・日本側によって書き残された史料が、一八六〇年の東学の創道および一八九四年の甲午農民戦争が起きてから一

世紀以上が経過した今日までも系統的に整理されていなかったために、研究の必須条件である「事実の徹底的な究明」、「事実の復元」が十分になされておらず、それゆえ、研究者たちは、歴史的な事実についての不徹底な考証の上で研究を続けてきたのが今までの事情であった。例えば、東学思想についての研究の場合をみると、『東經大全』と『龍潭遺詞』に見られる「無為而化」という用語を「自我より世俗的関心と情熱を絶対に放棄することを要求することであった。」と解釈することによって、東学思想を実践的行為を否定する観念的・幻想的・運命論的な思想として扱ってしまう研究者もいるし、一八七一年三月の寧海における東学教徒たちの蜂起時、当時東学教主であった崔時亨が蜂起の最高指導者李弼済に、蜂起しないよう挽留しただけでなく、李弼済の蜂起への参加提議さえ断ったという歪曲された事実に基づき、甲午農民戦争における東学内部の「南接と北接」の対立を事実以上に誇張している先行研究も多かった。こうした研究は、徹底的な事実の解明と史料考証の欠如、および史料の扱いにおける限界から出てきた現象であろう。

したがって、現在、優先的に解決すべき課題としては、甲午農民戦争関連史料の系統的な調査・収集、分類および整理、一定の体系による編纂や刊行などの事業が求められる。この点については、筆者もすでに管見を示したことがあるが、最近、甲午農民戦争百周年を記念するために組織されたいくつかの団体がこの点に留意し、体系的な史料収集および編纂事業に取り組

んでいることに期待を寄せたい。

第二に、史料の正確さとその史料的な価値に関する検討の問題である。東学と甲午農民戦争に関する多くの史料は、甲午農民戦争の当事者が書き残したというよりも第三者により書き残された史料がほとんどである。つまり、東学教門の指導者または甲午農民戦争を主導した主体勢力が書き残した史料よりも、むしろ東学を厳しく弾圧したり、率先して甲午農民戦争を弾圧したりした朝鮮王朝側(官側)・儒生側・日本側が書き残した史料の方が多いのが実状である。これらの史料によると、東学は「惑世誣民」の思想であり、東学教徒はこれに眩惑された愚民の集団である。また、一八九四年の甲午農民戦争は単なる反乱であり、農民戦争を主導した東学農民軍は反乱を主導した匪徒に過ぎなかったとされている。要するに、東学や農民軍を弾圧した側が書き残した史料では、東学と甲午農民戦争が持つ進歩的または近代的な性格は完全に無視され、あるいは隠蔽され、水準の低い迷信的な要素だけが強調される。それゆえ、研究者は既存の東学と甲午農民戦争の関連史料が抱えているこうした問題点を十分に考慮しなければならないだろう。

そののみならず、東学教門側や甲午農民戦争を主導した東学農民軍側が書き残した史料も、やはりいくつかの問題点を抱えていることに留意しなければならない。まず、指摘しなければならぬ問題点は、一つの歴史的な事実を宗教的に潤色することによって事実を歪曲したことである^⑩。また、長期間にわたっ

て朝鮮政府および地方官の厳しい弾圧を受けている間、弾圧の口実となりうるものは計画的に削除したり、事実とは反対に記録する場合も少なくなかったという点^⑪が挙げられる。さらに、ほとんどの東学教団側の史料は、公式な立場で体系的に編纂され刊行されたものではなく、各地方の東学組織、すなわち「接」または「包」別に編纂され刊行されたため、教団全体の状況を正確に記すことが難しかった。史料の編纂者らは、厳しい弾圧を避けるために各地方を転々としながら、自分が見たり聞いたたりした事実だけを記したケースも多かったのである。それに加えて、東学組織の「接」や「包」は、その制定初から徹底的な人的結合を中心とした「淵源制(聯臂制)」をもとに組織化されたため、その淵源の異なる他の地域の「接」や「包」の状況については簡単に記録するしかなかったという点にも注意が必要である。

それゆえ、東学思想と甲午農民戦争に関する事実の解明や考証のためには、徹底した史料批判が不可欠である。また、どちらか一方の史料だけに依存したり、信賴しすぎることは避けるべきである。これに加え、各史料との関係が深い地域についての現地調査、史料に記されている地名の徹底的な考証、各地域で伝えられている甲午農民戦争に関する^⑫이야기(伝承)の積極的な活用が求められる。

第三に、研究の視点の問題である。前述したように、先行研究では、まず東学と甲午農民戦争との関係をセットで把握する

見解、つぎに両者の関係を全面的に否定したりまたは全面的に肯定したりせず、ただの有機的な関連性だけがあつたと見る見解、最後に両者はいかなる関連性もなく、東学がなかったとしても甲午農民戦争は必然的に起きるはずだったというような見解などが対立している。甲午農民戦争の指導者である全瑛準についても、東学の下級幹部として東学思想を実践的に再解釈した思想家として見る見解や、東学とは関連のない別の思想家であり、東学の接主でもなかったと主張する見解に分かれている。そして、東学思想こそが甲午農民戦争の指導理念であつたと主張する見解は、戦後いわゆる「植民主義史学」の克服という命題に嵌められ、東学の役割を過大評価したと批判されており、それに対して東学と農民戦争との関係を遮断しようとする見解は、階級闘争を根幹とする唯物論的な歴史理解に傾きすぎて歴史的な事実を歪曲したと評価されている。

以上のような問題点を克服するためには、何よりも実証的な研究を踏まえ、事実の解明に力を注ぐことが求められる。そして、事実の解明を通じて明らかにしたことや新しい視点で検討し、その歴史的意味を導き出すことによって東学と甲午農民戦争研究の新しい場を開かなければならない。

第四に、孤立主義的研究姿勢の克服の問題である。東学は、近代朝鮮の歴史上の初めての民衆思想であり、甲午農民戦争は、そうした東学の思想や組織をもとにして起きた近代朝鮮の最大の民衆運動である。また、東学思想の中で示された「平等」の

思想や甲午農民戦争の理念として表われた「反封建・反侵略」の課題は、依然として解決すべき課題として残されている。ところが、東学思想や甲午農民戦争の理念が持っている歴史的な意義とその現在の継承の重要さにもかかわらず、先行研究では十分にその回答を得ることができないとされている。その主な原因は、前述したように同じ出来事をめぐって、一方では高い評価がなされているのに対し、他方では正反対の評価をするという、相反した見解があるからだと思われる。このような状況をもたらした一つの要因として考えられるのは、孤立主義的研究姿勢、および各学問分野の間の共同研究がうまく行われてこなかった点であろう。たとえば、東学の後身である天道教側の研究成果が、学界に十分に受け入れられたことはほとんど稀であり、また学界の研究が天道教側に受容されたことも、一九六〇年代の『韓国思想』の場合を除けばほとんどないのが実状である。歴史学、哲学、宗教学、文学など、各学問分野の研究者たちが顔をあわせて学際的な研究を試みた事例もなく、実証的な研究を中心とする研究者たちと社会経済史的な側面を重視する若手研究者たちが素直に討論したこともない。もちろん、韓国をはじめ、日本、北朝鮮、中国、アメリカ、ロシアなどの研究者たちが同じ場所に集まって、議論の場を設けたこともほとんどない。

まさに今、われわれはこのような状況を克服すべき時期を迎えており、甲午農民戦争の百周年はそのきっかけになりうるだ

ろう。これからは、天道教界と学界が互いに交流し、各学問分野の研究者による学際的な研究が活性化し、実証的な研究を中心とする研究者たちと新たな考え方を持った研究者たちが交流し、韓国や北朝鮮の研究者をはじめ、海外の関係研究者たちが同じ場での議論・農民戦争の現場についての共同調査・史料および情報の交換を行い、東学思想と甲午農民戦争の歴史的な意味を総体的に明らかにする新しい研究環境を作っていかねばならない。

最後に、東学や甲午農民戦争とのかかわりが深い地域での研究活性化の問題である。我々は東学と甲午農民戦争についていえば、まず朝鮮の全羅道と古阜、そして全瑋準を思い出す。なぜならこれらは甲午年の蜂起の主な舞台、または主役であったためであろう。ところが、この地域の現実はどうなっているか。多数の大学があるにも関わらず、東学や甲午農民戦争に関する体系的な研究や史料調査を担当している研究所が一つもないのが実状である。もちろん、当該大学で専門講座を設けたこともない。

しかし、このような現実には全羅道地域だけの問題ではない。実は、東学は一八六〇年に慶尚道ではじまり、一八六〇年代の後半には慶尚道の北部地方を中心として布教された。一八七〇年代には忠清道および江原道の山間地方を中心に伝播され、一八八〇年代に入ってから、初めて平野地帯である全羅道地域と京畿道地方に進出し、一八九〇年代には黄海道まで布教され

た。一八九四年の甲午農民戦争の時、東学農民軍が蜂起し官衙(郡の役所)を占領し、鎮圧のために出動した朝鮮政府軍と日本軍を相手に熾烈な戦闘を行った地域のほとんどは、東学が布教され東学の組織である「接」または「包」が置かれていた地域と正確に一致している。したがって、東学と一八九四年の甲午農民戦争に関するこれまでの全羅道中心の研究は、この分野に関して総体的な理解を提供するには限界がある。さて、これからは全羅道・全瑋準・参礼集會・ソウル伏閣上訴および「斥倭洋」檄文揭示運動・報恩集會・古阜民乱・茂長における三月蜂起(第一次甲午農民戦争)・黄土峴戦闘・黄竜村戦闘・全州城占領・全州和約・執綱所・参礼における九月再蜂起(第二次甲午農民戦争)・論山^{ロンスン}での南北接合流・牛金峙戦闘などを中心とする図式的な研究を克服し、各地方での東学組織の実態、地域別の東学農民軍の蜂起およびその活動を究明する研究に転換しなければならぬ。それとともに、東学思想と甲午農民戦争の主な舞台となった地域を中心とする地域研究団体の組織化と研究が活性化されなければならないだろう。

注

(1) 東学思想と甲午農民戦争についての先行研究は、つぎの筆者の博士學位論文にまとめられている。

「崔時亨研究―主要活動と思想を中心に―」(「博士論文」、韓国

精神文化研究院、一九九六年二月)

(2) 東学思想と甲午農民戦争についての研究史は、つぎのような論文によって検討されている。

金容燮「東学乱研究論」(『歴史教育』三、歴史教育研究会、ソウル、一九五八年)

金龍徳「東学思想についての諸説の検討」(『中大新聞』二八八、中央大学校、ソウル、一九六四年)・『韓国史の探究』、乙酉出版社、ソウル、一九七一年

李鉉淙「東学乱とはなにか」(『新東亜』二四、東亜日報社、ソウル、一九六六年八月号)

鄭万祚「東学乱の性格についての再検討」(『形成』二一、ソウル大学校文理科大学、一九六八年八月)

樗村秀樹「『東学史』解説」(『東学史』朝鮮民衆運動の記録、東洋文庫一七四、一九七〇年十一月)

申一澈「東学」(『韓国史論』四・朝鮮後期、国史編纂委員会、ソウル、一九七六年)

申福龍「東学研究の推移」(『東学思想と韓国民族主義』、平民社、ソウル、一九七八年)

慎鏞厦「東学、独立協会、その他の諸団体」(『韓国史論』五・近代、国史編纂委員会、ソウル、一九七八年)

呉益済「東学思想研究の方向」(『韓国思想』一八、韓国思想研究会、ソウル、一九八一年)

鄭昌烈「東学と農民戦争」(『韓国史研究入門』、知識産業社、ソウル、一九八一年)

鄭昌烈「東学と東学乱」(『韓国学研究入門』、知識産業社、ソウル、一九八一年)

金昌洙「東学革命運動と全瑋準」(『韓国思想』一九、ソウル、一九八二年)

韓祐勸「東学と東学乱」(『韓国学入門』、学術院、ソウル、一九八三年)

申福龍「東学研究序説」(『東学思想と甲午農民革命』、平民社、ソウル、一九八五年)

鄭昌烈「甲午農民戦争と甲午改革」(『第二版韓国史研究入門』、知識産業社、ソウル、一九八八年)

安秉旭「甲午農民戦争の性格と研究状況」(『韓国近現代研究入門』、歴史批評社、ソウル、一九八八年)

楊尚弦「一八九四年の農民戦争と抗日義兵戦争」(『南北韓歴史認識の比較講義』、^{イムンテジョン}임운정, ソウル、一九八九年)

金昌洙「東学革命の研究史論」(『韓国思想』二一、一九八九年)

高東煥「開港以降の下からの変革運動」(『民族解放運動史』、歴史批評社、ソウル、一九九〇年)

河元鎬「ブルジョア民族運動の発生発展」(『北朝鮮の韓国史認識』二、ハンギル社、ソウル、一九九〇年)

李栄昊「韓国近代民族運動の動向と国史教科書の叙述」(『歴史教育』四七、歴史教育研究会、ソウル、一九九〇年)

(3) 一九九〇年六月三〇日、ソウルの歴史問題研究所の主催で行われた「東学農民戦争の用語および性格討論会」でも、甲午

農民抗争を「東学農民戦争」と呼ぶべきだという見解と、「甲午あるいは一八九四年農民戦争」と呼ぶべきだという見解とがせりあい、また「戦争」と呼ぶべきだという主張と、「革命」と呼ぶべきだという主張とが対立した。このことは、一九九〇年までの段階の甲午農民戦争の研究水準を雄弁に物語っているように見てよい。

(4) 韓国における東学思想と甲午農民戦争に関する研究は、一九九〇年代に入り、全く新たな局面を迎える。多くの若手研究者の登場、甲午農民戦争関連史料の大量の発見、各地域での記念事業会の設立、国民レベルでの関心の高まりなどによって、質的にも量的にも研究が大きく進展するに至る。これについては、別稿で詳しく考察したい。

(5) 一九〇五年、孫秉熙(ソンボン熙)により、従来の「東学」が「天道教」に改編された。

(6) 甲午農民戦争に参加した東学(天道教)教徒の手記としては、つぎのようなものが代表的である。

洪鐘植「東学乱実話」(『新人間』三四、一九二九年四月号)

権秉憲「甲午年(イチャギ)天道教会月報」二五九―二六四、一九三二年九月号―一九三三年三月号)

朴寅浩「甲午東学の起兵実話(回顧秘談)」(『中央』三一―一九三五年二月号)

(7) 『天道教会月報』、『新人間』などに載せられた天道教の知識人たちの東学と甲午農民戦争についての初歩的研究としては、つぎのようなものがある。

車相瓚「東乱雑話」(『新人間』一一二、一九二六年四月号―六月号)

李敦化「東学の史的考察」(『新人間』三―四、一九二六年七月号―八月号)

장운룡(チャンウンリョウ)「東学乱の民衆運動の価値」(『新人間』一一、一九二七年三月号)

棲鳳山人「甲午革命運動と崔海月、全瑋準」(『新人間』一一、一九二七年三月号)

白仁玉「甲午東乱の朝鮮民衆運動の価値」(『新人間』一六―一七、一九二七年九月号―一〇月号)

朴思稷「東学党の甲午革命乱の側面」(『新人間』一六―一七、一九二七年九月号―一〇月号)

(8) 『開闢』誌などに載せられた論説は、つぎのようなものがある。

李敦化「人乃天の研究」(『開闢』一一六、一九二〇年六月号―十二月号)

白頭山人「洪景来と全瑋準」(『開闢』五、一九二〇年十一月号)

黄義敦「民衆的叫号の第一声たる甲午の革新運動」(『開闢』二二―二三、一九二二年四月号―五月号)

李敦化「甲午東学と階級意識」(『開闢』六八、一九二六年四月号)

張道斌「甲午東学乱と全瑋準」(徳興書林、京城、一九二六年)

(9) 一九一〇年代から一九二〇年代にわたって、天道教および

侍天教の機関紙などに載せられた東学思想と甲午農民戦争を素材にした新小説については、つぎの研究を参照されたい。

姜仁秀『韓国文学と東学思想』（図書出版地平、釜山、一九八九年）一八一—一九頁。

(10) 裴元燮「性格および用語についての研究史検討」（『東学農民戦争用語および性格の討論会要旨』、歴史問題研究所、ソウル、一九九〇年六月三〇日）

(11) 甲午農民戦争以降、東学教団はさまざまな分派に分けられる。第一に、甲午農民戦争の「反侵略」の理念をそのまま継承し、一八九四年以降も積極的に反侵略闘争を続けていく勢力（義兵、活貧党、英学党など）、第二に、親日化されていく勢力（侍天教、一進会など）、第三に、開化＝近代化を掲げて近代文明を積極的に受け入れる勢力（天道教）、第四に、徹底的な隠遁主義を掲げて宗教的修道だけを強調する勢力（敬天教、青林教、東学教）、第五に、他の新宗教に編入または新しい宗教を設立していく勢力（天主教への改宗、甌山教や円仏教などの創立）などがある。この点については別稿で論じることにはしたい。

(12) 甲午年以降の東学教団の分裂現象、および日本の植民地時代という時代的制約などが東学思想および甲午農民戦争についての研究に及ぼした影響については、つぎのような論文が参考になろう。

拙稿「東学資料の再検討」（『人間と経験』二、漢陽大学校民族学研究所、安山、一九九〇年）

(13) 甲午農民戦争が起きた時、外交分野で日本および朝鮮で活

躍した日本人が残した手記や回顧録としては、つぎのようなものがある。

陸奥宗光『蹇蹇録』（二八九五年）

杉村濤『明治廿七、八年在韓苦心録』（一九三二年）

林董『後は昔の記（回顧録）』（東洋文庫、一九六〇年）

(14) 一九一〇年八月、日本による「朝鮮併合」以降から一九二〇年代までの東学思想および甲午農民戦争に関する日本人の著作には、つぎのようなものがある。

渡辺彰『東経大全和訓』（日韓印刷所、京城、一九一八年）

渡辺彰『天道教と侍天教』（大阪屋号書店、一九一九年）

細井肇『東経正義』上・下（自由討究社、東京、一九二三年）

細井肇『侍天教の教旨』（自由討究社、東京、一九二三年）

幣原坦『天道教と侍天教』（『朝鮮史話』、富山房、東京、一九二四年）

(15) 田保橋潔『東学党の変乱と日支の干渉』（『近代日支鮮関係の研究』、京城帝国大学、一九三〇年）

「東学変乱」（『近代日鮮関係の研究』、朝鮮総督府中樞院、一九四〇年）

「東学匪乱」（『日清戦役外交史の研究』、刀江書院、一九五一年）

(16) 村山智順「東学系類似宗教団体」（『朝鮮の類似宗教』、朝鮮総督府中樞院、一九三五年）

(17) 菊池謙讓「東学党の乱」（『近代朝鮮史』下、啓明社、一九三九年）

- (18) 石井寿夫「教祖崔濟愚における東学思想の歴史的展開」『歴史学研究』八五、一九四一年一月
- (19) 野原四郎「近代支那朝鮮をめぐる日露関係」『世界歴史大系』第九巻東洋近世史二、平凡社、一九三四年
- (20) 石井寿夫「教祖崔濟愚における東学思想の歴史的展開」『歴史学研究』八五、一九四一年一月、六〇頁。
- (21) 『龍潭遺詞』は、東学の教祖崔濟愚が作ったハングル經典である。そのタイトルも、ハングルで表記されており、また固有名詞なので、ハングルの名前の『용담유사』で表記すべきである。ところで、石井が資料として用いた『용담유사』は、東学の分派である上帝教の教主となった金演局(彼は、もともと東学の第二代教主崔時亨の弟子であった)の息子金文卿が『靑丘学叢』七―八号(一九三二年)に載せた『註釈龍潭遺詞』であった。しかし、『註釈龍潭遺詞』には「犬のような倭賊」(東学のハングル經典『용담유사』の「안심가」に出る)という表現などは、削除されたまま載せられている。
- (22) 金榮作『韓末ナショナリズム研究』(清溪出版社、ソウル、一九八九年) 一九七頁。
- (23) 金庠基の「東学と東学乱」は、一九三一年に『東亜日報』に連載されたが、戦後の一九四七年にソウルの大成出版社によって単行本となった。一九七五年には、若干書き直されて韓国日報社によって再び単行本として出版された。
- (24) 尹炳奭「『東学党暴動』解題」(『韓国学研究』五別集、仁荷大学校韓国学研究所、仁川、一九九三年)
- (25) 林和「水雲主の文化哲学批判」(『新階段』一卷六号、一九三三年三月号)
- (26) 李清源「人乃天主主義の現代的考察」(『批判』五巻六号、一九三七年二月号)
- (27) 一九三〇年代の天道教の「文化主義」路線をめぐる社会主義者と天道教の知識人との論争は、別稿を待つことにしたい。
- (28) 全錫淡『朝鮮經濟史』(博文出版社、ソウル、一九四九年) 一五五―二〇八頁。
- (29) 朴慶植「開国と甲午農民戦争」(『歴史学研究』特集号・朝鮮史の諸問題、一九五三年)
- 姜在彦「朝鮮における封建体制の解体と農民戦争」(『歴史学研究』一七三、一七七、一九五四年)
- (30) 戦後から一九七〇年代までの主な研究は、以下のようである。
- 全錫淡「東学農民乱とその教訓」(解放社、ソウル、出版年度未詳)
- 李清源「甲午農民戦争の性格とその歴史的意義」(『歴史諸問題』三、ソウル、一九四八年)
- 全錫淡「李朝封建社会の総結としての東学農民乱」(『朝鮮經濟史』、博文出版社、ソウル、一九四九年)
- 朴慶植「開国と甲午農民戦争」(『歴史学研究』特集号・朝鮮史の諸問題、一九五三年)
- 姜在彦「朝鮮における封建体制の解体と農民戦争」(『歴史学研

究」一七三・一七七、一九五四年)

安용태「甲午農民戦争」(科学院出版社、平壤、一九五七年)

金容燮「東学乱研究論」(『歴史教育』三、ソウル、一九五八年)

金容燮「全琿準供招の分析」(『史学研究』二、ソウル、一九五八年)

吳吉宝「討論…甲午農民戦争と東学」(『歴史科学』五、平壤、一九五九年)

吳吉宝「討論…甲午農民戦争と東学について、執綱所について」(『歴史科学』五、平壤、一九五九年)

金사역「討論…一八九四(甲午)農民戦争史研究で提起されるいくつかの問題点」(『歴史科学』五、平壤、一九五九年)

金容식「討論…甲午農民戦争と東学との関係について」(『歴史科学』五、平壤、一九五九年)

金사역他「甲午農民戦争に関する科学討論会」(『歴史科学』五、平壤、一九五九年)

朴宗根「甲午農民戦争における全州和約と幣政改革案」(『歴史評論』一四〇、一九六二年)

朴宗根「東学と一八九四年の農民戦争について」(『歴史学研究』二六九、一九六二年)

山辺健太郎「朝鮮史話一—三—東学乱と日本人—」(コリア評論六—二—四、一九六四年六月号—八月号)

金龍徳「東学思想研究」(『中央大論文集』九、ソウル、一九六四年)

金義煥「初期東学思想に関する研究」(『わが国の近代化史研究』釜山、一九六四年)

韓祐勸「東学軍の幣政改革案についての検討」(『歴史学報』二三、ソウル、一九六四年)

韓祐勸「東学乱の起因に関する研究」(『垂細垂研究』一五—一六、ソウル、一九六四年)

吳吉宝「一八九四—一八九五(甲午)農民戦争の性格について」(『歴史科学』三、平壤、一九六四年)

吳吉宝「甲午農民戦争」(朝鮮労働党出版社、平壤、一九六八年)

梶村秀樹「李朝末期朝鮮の繊維製品の生産及び流通状況」(『東洋文化研究所紀要』四六、一九六八年)

朴宗根「一八九四年における日本軍撤兵問題と朝鮮『内政改革』案登場の背景」(『朝鮮史研究会論文集』五、一九六八年)

姜在彦「東学Ⅱ天道教の思想的性格」(『思想』五三七、一九六九年)

姜在彦「甲午農民戦争」(『岩波講座世界歴史』二二(近代九)、一九六九年)

韓祐勸「東学思想の本質」(『東方学志』一〇、ソウル、一九六九年)

韓祐勸「東学のリーダーシップ」(『白山学報』八、ソウル、一九七〇年)

金義煥「一八九二—三年の東学農民運動とその性格」(『韓国史研究』五、ソウル、一九七〇年)

姜在彦「封建体制解体期の甲午農民戦争」(『朝鮮近代史研究』、一九七〇年)

韓祐勸「東学乱起因に関する研究」(ソウル大学校出版部、一九七一年)

韓祐勸「東学の唱道とその基本思想」(『韓国史』一五、国史編纂委員会、一九七三年)

韓祐勸「東学の性格と東学教徒の運動」(『韓国史』一七、国史編纂委員会、一九七三年)

韓祐勸「東学農民軍の第一次蜂起」(『韓国史』一七、国史編纂委員会、一九七三年)

韓祐勸「東学農民軍の第二次蜂起」(『韓国史』一七、国史編纂委員会、一九七三年)

具良根「東学思想と鄭鑑録の関連性考察」(『朝鮮奨学会学術論文集』四、一九七四年)

金義煥「全州和約と執綱所」(『韓国思想』一二、ソウル、一九七四年)

金義煥「甲午農民抗争と南北接問題」(『^{ナラサラン}』一五、ソウル、一九七四年)

金龍徳「東学軍の組織について」(『韓国思想』一二、ソウル、一九七四年)

金榮作「東学思想と農民蜂起」(『韓末ナショナリズム研究』、東京大学出版会、一九七五年)

具良根「東学農民軍の戦闘経過の検討―第二次蜂起における日本軍との交戦を中心として」(『朝鮮奨学会学術論文集』五、一

九七五年)

朴宗根「日清開戦における日本軍の朝鮮王宮占領事件に対する朝鮮人民の反抗闘争」(『歴史評論』三一六、一九七六年)

具良根「東学農民軍の第二次蜂起と日本軍の部署」(『新韓学報』一八、新韓学術研究会、一九七六年)

横川正夫「全琫準についての一考察」(『朝鮮史研究会論文集』一三、一九七六年)

金義煥「甲午年東学軍の全州占領と民衆の動態」(『韓国思想』一五、ソウル、一九七七年)

金義煥「甲午年九月再起後の東学農民抗争とその性格」(『韓国学研究』二、東国大学校、ソウル、一九七七年)

裴翰権「東学思想その性格と限界」(『釜山教育大学研究報告』一三一、一九七七年)

韓祐勸「東学農民軍の蜂起と戦闘―江原・黄海道の場合―」(『韓国史論』四、ソウル大学校国史学科、一九七八年)

呉吉宝「反封建反侵略闘争としての甲午農民戦争」(『歴史科学』三、平壤、一九七八年)

朴宗根「朝鮮近代における民族運動の展開」(『歴史学研究』四五二、一九七八年)

安晉吾「東学思想の淵源とその展開」(『歴史学研究』八、全南大学校史学会、光州、一九七八年)

瀬古邦子「甲午農民戦争における執綱所について」(『朝鮮史研究会論文集』一六、一九七九年)

馬淵貞利「甲午農民戦争の歴史的位置」(『朝鮮歴史論集』下、

龍溪書舎、一九七九年

(31) 安秉旭「甲午農民戦争の性格と研究状況」(『韓国近現代研究入門』、歴史批評社、ソウル、一九八八年) 五三頁。

(32) 安秉旭、前掲論文、四一頁。

(33) 鄭昌烈「甲午農民戦争と甲午改革」(『第二版韓国史研究入門』、知識産業社、ソウル、一九八七年) 四三七頁。

(34) 一九八〇年代の主な研究は、つぎのようである。

平木実「朝鮮の東学における祈禱について」(『天理大学学報』一二八、一九八〇年)

鄭昌烈「東学教門と全臻準との関係」(『十九世紀韓国伝統社会の変貌と民衆意識』、高麗大学校民族文化研究所、ソウル、一九八二年)

鄭昌烈「韓末変革運動の政治経済的性格」(『韓国民族主義論一、創作と批評社、ソウル、一九八二年』)

趙景達「東学農民運動と甲午農民戦争の歴史的性格」(『朝鮮史研究会論文集』一九、一九八二年)

趙景達「甲午農民戦争の指導者全臻準の研究」(『朝鮮史叢一九八三年』)

洪性讚「一九九四年執綱所期設包下の郷村事情」(『東方学志』三九、ソウル、一九八三年)

정창익「一九九三年報恩集會鬭争の性格について」(『歴史科学』三、平壤、一九八四年)

申榮祐「一九九四年嶺南醴泉の農民軍と保守執綱所」(『東方学志』四四、ソウル、一九八四年)

檜山幸夫「朝鮮出兵事件と海外出兵体制の形成」(『中京法学』一八巻四号、一九八四年)

慎鏞廈「甲午農民戦争の第一次農民戦争」(『韓国学報』四〇、ソウル、一九八五年)

慎鏞廈「甲午農民戦争時期の農民執綱所の設置」(『韓国学報』四一、ソウル、一九八五年)

慎鏞廈「甲午農民戦争時期の農民執綱所の活動」(『韓国文化』六、ソウル大学校韓国文化研究所、一九八五年)

慎鏞廈「甲午農民戦争の主体勢力と社会身分」(『韓国史研究』五〇―五一、ソウル、一九八五年)

慎鏞廈「古阜民乱の沙鉢通文」(『魯山劉元東博士華甲記念論叢』韓国近代社会経済史研究、正音文化社、ソウル、一九八五年)

鄭昌烈「古阜民乱の研究」上・下(『韓国史研究』四九、ソウル、一九八五年)

朴賛勝「東学農民戦争の社会経済的志向」(『韓国民族主義論三、創作と批評社、ソウル、一九八五年』)

鄭昌烈「東学思想の社会意識」(『韓国学論集』九、漢陽大学校韓国学研究所、ソウル、一九八六年)

申榮祐「一九九四年嶺南尚州の農民軍と召募營」上・下(『東方学志』五一―五二、ソウル、一九八六年)

檜山幸夫「第一次朝鮮出兵事件について」一―三(『中京法学』二〇巻三号、四号、二二巻一号、一九八六年)

慎鏞廈「東学と甲午農民戦争の民族主義」(『韓国学報』四七、

ソウル、一九八七年)

慎鏞廈「東学の社会思想」(『韓国近代社会思想史研究』、一志社、ソウル、一九八七年)

檜山幸夫「第一次朝鮮出兵事件について」四(完)(『中京法学』二二巻二号、一九八七年)

申栄祐「一九八四年嶺南北西部地方の農民軍指導者の社会身分」(『学林』一〇、延世大学校史学研究会、一九八八年)

姜昌一「天佑俠と『朝鮮問題』——『朝鮮浪人』の東学農民戦争への対応と関連して——(『史学雑誌』九七巻八号、一九八八年)

檜山幸夫「七・二三京城事件と日韓外交」(『韓』一一五、一九八九年)

李離和「全臻準と東学農民戦争」一一四、(『歴史批評』七一—〇、ソウル、一九八九年—一九九〇年)

李栄昊「甲午農民戦争以降の東学農民の動向と民族運動」(『歴史と現実』三、ソウル、一九九〇年)

(35) 鄭昌烈、注33の論文、四三八頁。

(36) 『東経大全』癸未仲夏版(一八八三年)の「布徳文」参照(原文は漢文)。日本語の訳は、渡辺彰「東経大全和訓」(京城、日韓印刷所、大正七年)、三頁(以下、『東経大全』からの引用は、『東経大全和訓』による)。

(37) 「論学文」、前掲書。日本語の訳は、渡辺彰「東経大全和訓」(京城、日韓印刷所、大正七年、一〇—一一頁)。

(38) 『龍潭遺詞』、癸未版(一八八三年)の「教訓歌」参照(原文、ハングル)。日本語の訳は、金文卿「註釈龍潭遺詞上

下」『青丘学叢』第七—八号(昭和七年二月、五月)から引用する(以下、同上)。

(39) 「論学文」、前掲書。

(40) 「道即天道、学即東学」(『論学文』、前掲書)

(41) 「勸学歌」『龍潭遺詞』(一八八三年版)

(42) 「布徳文」、前掲書。

(43) 「論学文」、前掲書。

(44) 「布徳文」、前掲書。

(45) 「安心歌」『龍潭遺詞』(一八八三年版)

(46) 「勸学歌」『龍潭遺詞』(一八八三年版)

(47) 初期東学における終末思想については、以下の研究を参照されたい。

趙景達「朝鮮の終末思想Ⅱ『鄭鑑録』と東学—植民地期を中心に—」(『歴史学研究』第七二四号、一九九九年六月号)、四二—五三頁参照。

(48) 初期東学における「有無相資」の思想については、筆者がはじめて明らかにした。「有無相資」思想については、以下の拙稿を参照されたい。

拙稿「崔時亨研究—主要活動と思想を中心に—」『韓国精神文化研究院 附設韓国学大学院博士学位論文』(一九九六年)

(49) 初期東学における平等思想については、これまで多くの研究者によって研究されてきた。代表的な研究としては、以下のものがあげられる。

金龍徳「東学思想研究」(『中央大学校論文集』第九集、ソウル、

- 同大学校、一九六九年)
- (50) 村山智順、前掲論文。
- (51) 田保橋潔、前掲論文。
- (52) 全錫淡「李朝封建社会の総結としての東学農民乱」(『朝鮮經濟史』、博文出版社、ソウル、一九四九年)
- (53) 吳吉宝、前掲論文。
- (54) 金容燮「全瑋準供招の分析」(『史学研究』二、ソウル、一九五八年)
- (55) 近年の天道教系の知識人たちの代表的な見解としては、つぎのような論文がある。
- 吳益濟「東学思想研究の方向」(『韓国思想』一八、ソウル、一九八一年)
- (56) 金庠基『東学と東学乱』(大成出版社、ソウル、一九四七年)
- (57) 金龍徳「東学思想研究」(『中央大論文集』九、ソウル、一九六四年)
- (58) 金昌洙「東学革命の研究史論」(『韓国思想』二一、ソウル、一九八九年)
- (59) 石井寿夫、前掲論文。
- (60) 朴慶植、前掲論文。
- (61) 姜在彦「朝鮮における封建体制の解体と農民戦争」一一二(『歴史学研究』一七三・一七七、一九五四年)
- 姜在彦「東学Ⅱ天道教の思想的性格」(『思想』五三七、一九六九年)
- 姜在彦「甲午農民戦争」(『岩波講座世界歴史』二二…近代九、一九六九年)
- 姜在彦「封建体制の解体期の甲午農民戦争」(『朝鮮近代史研究』、日本評論社、一九七〇年)
- (62) 韓祐昉、前掲論文。
- (63) 金義煥、前掲論文。
- (64) 金榮作、前掲論文。
- (65) 横川正夫、前掲論文。
- (66) 金龍徳、前掲論文、二二四頁。
- (67) 朴慶植「開国と甲午農民戦争」(『歴史学研究』特集号…朝鮮史の諸問題、一九五三年)三二頁。
- (68) 朴慶植、前掲論文、三四頁。
- (69) 姜在彦「東学Ⅱ天道教の思想的性格」(初出は『思想』五三七号へ一九六九年)七八頁、『近代朝鮮の变革思想』、日本評論社、一九七三年)七九頁。
- (70) 姜在彦「韓国近代史研究」(『ハメル』、ソウル、一九八二年)一五七―一五九頁。
- (71) 韓祐昉「東学思想の本質」(『東方学志』一〇、ソウル、一九六九年)七〇頁。
- (72) 韓祐昉、前掲論文、六五頁。
- (73) 韓祐昉「東学と東学乱」(『韓国学入門』、学術院、ソウル、一九八三年)一六二―一六三頁。
- (74) 金義煥「近代朝鮮の東学農民運動史の研究」(和泉書院、大阪、一九八六年)三七―四一頁。

- (75) 金榮作『韓末ナショナリズムの研究』(東京大学出版会、一九七五年)二二二頁。および(清溪研究所、ソウル、一九八九年)二二二頁。
- (76) 金榮作『韓末ナショナリズムの研究』(東京大学出版会、一九七五年)二三〇頁、および前掲書(一九八九年)二二九頁。
- (77) 慎鏞廈『東学と甲午農民戦争の民族主義』(『韓国学報』四七、ソウル、一九八七年)四九一五〇頁。
- (78) これは、史料の誤った引用である。実際に、崔時亨は李弼濟とともに一八七一年三月の蜂起で積極的な役割を果たしていた。この点については、つぎの研究を参照されたい。
- 拙稿、『嶠南公蹟解題』(『韓国史学』一〇、韓国精神文化研究院、城南、一九八八年)
- (79) 全錫淡、前掲論文、一七〇—一七二頁。
- (80) 全錫淡、前掲論文、一七一頁。
- (81) 金容燮『全瑋準の供招の分析』(『史学研究』二、ソウル、一九五八年)四八—四九頁。
- (82) 金容燮、前掲論文、二二頁。
- (83) 盧鏞弼『吳知泳の人物と著作物』(『東亜研究』一九、西江大学校、ソウル、一九八九年)
- 李離和『吳知泳『東学史』の内容検討』(『民族文化』一二、民族文化推進会、ソウル、一九八九年)
- (84) 金容燮の見解が卓見であったにもかかわらず、取り上げられた史料に問題があったことは、すでに金龍徳と韓治勸によって指摘されたとおりである。この点については、つぎの論文を参照されたい。
- 金龍徳『東学思想研究』(『中央大論文集』九、ソウル、一九六四年)二二〇頁。
- 韓治勸『東学と東学乱』(『韓国学入門』、学術院、ソウル、一九八三年)一六〇頁。
- (85) 楊尚弦^{ヤンシヒョソ}『二八九四年農民戦争と抗日義兵戦争』(『南北韓の歴史認識比較講義』、^{イルソンチョソ}임송정、ソウル、一九八九年)一二八頁から再引用。
- (86) 楊尚弦、前掲論文、一二八頁から再引用。
- (87) 朴宗根『東学と一八九四年の農民戦争について』(『東学革命の研究』、白山書堂、ソウル、一九八二年)三八頁。
- (88) 朴宗根、前掲論文、三四頁。
- (89) こうした見方を代表する論文には、金容燮の「全瑋準供招の分析」(一九五八年)がある。
- (90) 鄭昌烈『古阜民乱の研究』上・下(『韓国史研究』四八・四九、ソウル、一九八五年)
- (91) 韓治勸『東学のリーダーシップ』(『白山学報』八、ソウル、一九七〇年)五〇二頁。
- (92) 梶村秀樹「李朝末期朝鮮の繊維製品の生産および流通状況」(一九六八年)と馬淵貞利「甲午農民戦争の歴史的的位置」(一九七九年)などが、富農主導説を代表する研究である。
- (93) 趙景達「東学農民運動と甲午農民戦争の歴史的性格」(一九八二年)、朴賛勝「東学農民戦争の社会経済的志向」(一九八五年)、慎鏞廈「甲午農民戦争の主導勢力と社会身分」(一九八

五年)などが、貧農主導説を代表している。

- (94) 申榮祐「一八九四年嶺南北西部地方の農民軍指導者の身分」〔『学林』一〇、ソウル、一九八八年〕

- (95) 梶村秀樹、前掲論文。

- (96) 韓治勸『東学乱の要因に関する研究』(ソウル大学校出版部、一九七一年)二〇六―二〇八頁。

- (97) 趙景達「甲午農民戦争の指導者」全準準の研究」〔『朝鮮史叢』七、青丘文庫、一九八三年〕七二頁。

- (98) 鄭昌烈「韓末変革運動の政治経済的性格」〔『韓国民族主義論』一、創作と批評社、ソウル、一九八二年〕二頁。

- (99) 鄭昌烈「甲午農民戦争と甲午改革」〔『第二版韓国史研究入門』、知識産業社、ソウル、一九八七年〕四四頁。

- (100) 慎鏞廈「甲午農民戦争の第一次農民戦争」〔『韓国学報』四〇、一九八五年〕一〇九頁。

- (101) 慎鏞廈「甲午農民戦争時期の農民執綱所の設置」〔『韓国学報』四一、一九八五年〕一〇三頁。

- (102) 朴賛勝^{パク・サンソン}「東学農民戦争の社会経済的志向」〔『韓国民族主義論』三、一九八五年〕七五頁。

- (103) 『Korean Repository』一八九五年六月号には、「東学軍とともに七ヶ月」という、ある改新教の宣教師の手記が載せられており、一八九四年の黄海道農民軍が改新教の宣教師に帰依し、命拾いをする内容が生々しく描かれている。

- (104) 甌山教^{オウサンキョウ}の教祖である全羅道の古阜出身の姜一淳^{カン・イルソン}が、東学農民軍の隊列の後につきながらも、農民軍の敗北を予想し、自分

の親族たちの農民軍への参加を中止させたということは(このことは、甌山教の經典である『大巡典経』に記されている)、逆に姜一淳の農民軍とのかかわりを示しており、彼が新しい宗教を開いたのは、一八九四年の東学農民軍の蜂起に対する彼の批判的な立場を反映しているものと思われる。

- (105) 一八九四年以降の東学農民軍の動向について部分的に取り上げている研究としては、つぎのようなものがある。

金度亨「韓末の義兵戦争の民衆的な性格」〔『韓国民族主義論』三、一九八五年〕

趙東杰「義兵運動の韓国民族主義上の位置」上〔『韓国民族運動史研究』一、ソウル、一九八六年〕

金祥起「朝鮮末の甲午義兵戦争の展開と性格」〔『韓国民族運動史研究』三、ソウル、一九八九年〕

- (106) 『歴史と現実』三(歴史批評社、ソウル、一九九〇年)参照。

(107) 崔済愚は「無為而化」を「天道」、すなわち宇宙自然の秩序あるいは理法の動きを象徴する概念、また全く人為的な操作や偽りのない状態を指す概念として用いた。彼は、いつも自分の弟子たちに「無為而化」の境地に到達できるよう修道に専念することを促した。それは、人間自らが「天道」に合一できるように、積極的に実践的な努力を尽くすべきだということを強調したものであって、決して現実の状況における実践的な努力を否定する概念として用いたとは思えない。東学思想の現実否定的、あるいは革命的性格を否定する主な根拠として指摘され

ている「無為而化」についての先行研究の見解には、検討すべき問題点があると考えられる。

- (108) 金榮作『韓末ナショナリズムの研究』（東京大学出版会、一九七五年）二二〇頁。

(109) 慶尚道寧海における李弼済の蜂起時、崔時亨が参加したことは、東学教門側の史料『崔先生文集道源記書』や朝鮮王朝側の史料『嶠南公蹟』が発見されることによって明らかになった。これについては、以下の論文を参照されたい。

拙稿「嶠南公蹟解題」〔韓国史学〕一〇、一九八九年

拙稿「東学史書『崔先生文集道源記書』とその異本について」

〔韓国宗教〕一五、裡里、一九九〇年

- (110) 拙稿「東学資料の再検討」〔人間と経験〕二、漢陽大学校民族学研究所、安山、一九九〇年

(111) この点については、趙東一チョウドイルの『東学成立と物語』（弘盛社、一九八二）が詳しい。

(112) 一八六〇年の東学の成立以降、教祖崔済愚によって作られ広く歌われた「剣歌」が、一八八〇年の『東経大全』の刊行当時、編集者によって除けられたことを指す。一八七一年三月、寧海における李弼済の蜂起の時、「教祖の伸冤」の名で当時の教主崔時亨をはじめ、多くの慶尚道北西部地方の教徒が蜂起に加わったにもかかわらず、一九一〇年以降次々と刊行された天道教側の史書のはとんどが、それを否定したのは、朝鮮王朝や地方官、儒生側の厳しい弾圧から教門を保護するためのやむを得ない措置として理解できる。

- (113) 前述した申榮祐の研究は、徹底的な現地調査と関連史料の広範な収集・活用を通じてなされた代表的な成果と思われる。